ヘイトスピーチと“カジュアルヘイト”に関する心理学的アプローチ

－社会の中に埋め込まれている無頓着な差別的言動－

渡辺　雅之*

A psychological approach to the problem of hate speech and “casual hate”

—Unconscious discriminatory behavior embedded in society—

Masayuki WATANABE

はじめに－問題の所在

近年、日本ではヘイトスピーチが社会問題化し、多文化共生社会に対する弊害となっている。とくに2013年頃から公然と行われるようになったいわゆるヘイトデモは、新大久保、鶴橋、川崎などのコリアンタウンを標的にした悪質なものである。これらは、標的にされた在日コリアン当事者の心身を深く傷つけるのみならず、日本社会の有り様・フェアネスを大きく毀損してきた。

ヘイトスピーチに関する実態報告書（公益財団法人人権教育啓発推進センター,2016年3月[1]）によれば、2012年4月から2015年9月までの3年6ヶ月間に行われた「全国デモ・街宣活動」は1152件であり、年平均に換算すると、約329件となり、ほぼ全国のどこかで毎日のように行われていたことになる。ただし、この調査はインターネット上に周知されたものを対象にしており、必ずしも正確な数ではなく、実数においては報告以上にあったと考えるのが妥当である。ヘイトスピーチは社会問題であると同時に教育問題でもある。報告書は子どもへの影響について、次のような指摘をしている。

> 外国人労働者の増加に伴い、共に日本で暮らす家族の数も増えている。外国人の子ども達は、日本において義務教育を受けることが可能である。しかし、未就学のままの児童・生徒や、就学しても日本語による授業が理解できない児童・生徒が数多く存在する。また外国人であることを理由に、いじめの対象となり、不登校や未就学につながっているケースもあるとされている。

ここに見られるように、ヘイトスピーチの蔓延は子どもたちの教育権を侵害する。そ

*大東文化大学文学部教育学科准教授

の一例として、2010年から埼玉県朝鮮学校への補助金が停止された問題がある。埼玉県は停止理由を「(朝鮮学校の) 財政上の諸問題」と説明するが、むしろそれはとってつけた理由であり本意ではない。補助金停止は一部の極右勢力の働きかけがきっかけと推察するが[2]、「北朝鮮は危険な (敵) 国」、「朝鮮学校は怪しいところ」「反日教育が行われている」、「日本にある学校なのだから日本の制度や文化に合わせるべき」、「日本 (私たち) の税金を投入すべきではない」など、デマと隣国に対する排外主義を含んだ県民感情が底流にある[3]。

> 埼玉朝鮮初中級学校に対する運営費補助金については、学校側が財務の健全化など県からの要請に対していまだ十分に応えきれていない。そもそも朝鮮学校は北朝鮮の影響下にある朝鮮総連が中心となって設立した学校である。その本国である北朝鮮は、日本人拉致問題を引き起こしたにもかかわらず、いまだに不誠実な対応をとり続けている。このような状況下で県民の貴重な税金から埼玉朝鮮初中級学校に運営費補助金を支出することは、納税者である多くの県民の理解を得ることは到底できない。よって、埼玉朝鮮初中級学校に対する補助金については、学校側が県からの要請にしっかりと応えるとともに、拉致問題等が解決されるまでは予算の執行を留保すべきである。
>
> 『埼玉県議会予算特別委員会附帯決議』, (平成24年6月) ※下線部筆者

こうした行政による措置が、「朝鮮半島にルーツを持つものは差別されても仕方がない」というヘイトスピーチの要因を作り出しているという批判を免れることはできない[4]。

また、ヘイトスピーチの多くは「日本から出て行け」などの排外主義を標榜しており、オールドカマーの在日外国人だけでなく、ニューカマーの外国籍の人々にも向けられている。近年は外国人旅行者に対して嫌がらせの域を越えた“ヘイトスピーチと言わざるを得ない事態”も頻出している。しかし、こうしたことが社会問題化したとは言え、それはまだ限られた人々のトピックであり、同時にヘイトスピーチに対する正しい理解が進んでいるとは言えない[5]。

そして、問題なのは過激な言動を伴うヘイトスピーチの底流にあるカジュアルヘイトである。前述した付帯決議に記されている「県民感情」はそれらに下支えされて形成されたものである。もっともこの言葉は学術的に定義されているわけではない。もともとヘイトスピーチを批判し、路上や言論市場でたたかってきた野間易通 (C.R.A.C.[6]) や中野晃一 (上智大学) らによって、ネット媒体等で使用されている造語である。(図1.参照) 渡辺雅之や安田浩一[7]らも2014年頃から、反差別イベントにおける講演・講座でカジュアルヘイトという言葉を使用し、日常の中に潜む差別問題を指摘している。

同じ含意のものとしてマイクロアグレションがあるが、これはヘイトスピーチに限定されるものではなく、ジェンダーバイアスなど差別問題に対する構造的かつ包括的な概

念で使用されている。そのため、本論においてはヘイトスピーチの問題性を明らかにするために、カジュアルヘイトという概念を用いることにする。

カジュアルヘイトとはどのようなものか、その実例を示しながら、どのような問題が潜んでいるかを明らかにするのが本稿の目的である。小林健治は「すべての差別感情はその裏に恐怖心を伴う」と言う。その心理的な背景はどういうものか、カジュアルヘイトが生起する原因について心理学的なアプローチを試みたいと思う。

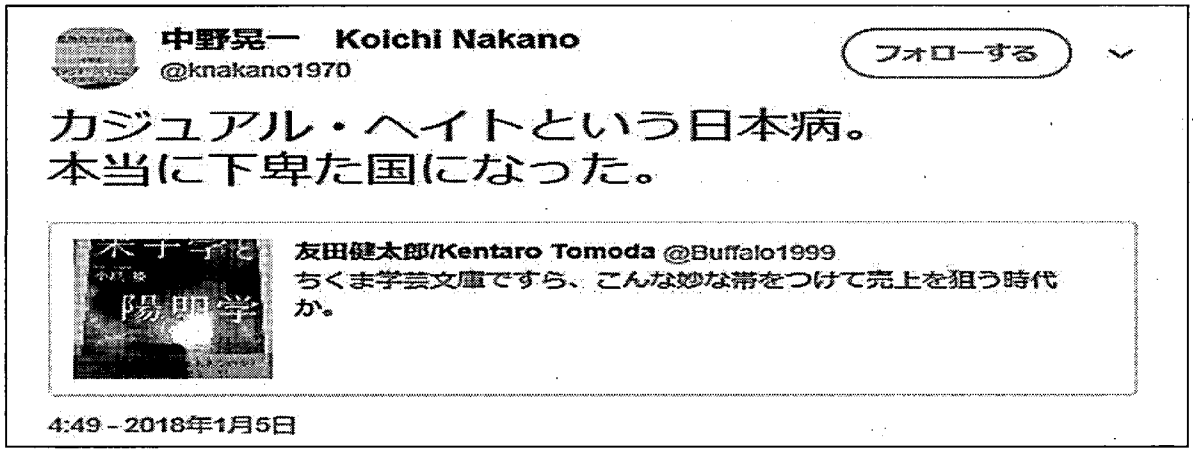

図1

1. ヘイトスピーチとは何か

(1) ヘイトスピーチの定義

カジュアルヘイトを論ずる前に、まずヘイトスピーチを定義づけなければならない。直訳すれば「憎悪の言葉」であり、いわゆる憎しみに満ちた「汚い言葉」と解する人が大半である。先の調査報告書においても「ヘイトスピーチについては、未だ確立した定義がない」とされており、具体的にどのような言動を持ってヘイトスピーチに該当するのか断定することは困難であると言うが、法務省人権擁護局がヘイトスピーチに関する啓発活動で配布しているポスターやリーフレットには、「特定の民族や国籍の人々を排斥する差別的言動が人々に不安感や嫌悪感を与えるだけではなく、人としての尊厳を傷つけたり差別意識を生じさせることになりかねず、許されるものではない」とある。

その後、2016年6月に「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取り組みの推進に関する法律」いわゆる“ヘイトスピーチ解消法”が成立し次のように定義された[8]。

第二条　この法律において「本邦外出身者に対する不当な差別的言動」とは、専ら本邦の域外にある国若しくは地域の出身である者又はその子孫であって適法に居住するもの（以下この条において「本邦外出身者」という。）に対する差別的意識

を助長し又は誘発する目的で公然とその生命、身体、自由、名誉若しくは財産に危害を加える旨を告知し又は本邦外出身者を著しく侮蔑するなど、本邦の域外にある国又は地域の出身であることを理由として、本邦外出身者を地域社会から排除することを煽動する不当な差別的言動をいう。

つづめて言えばヘイトスピーチは出自や属性を対象にした「差別扇動表現」であるといえよう。金（2018）は、ヘイトスピーチが不特定多数を対象にするのに対して、特定の個人への差別をレイシャルハラスメントと区別し、「さまざまな被害を一緒くたにするような概念的な混乱を避けるためにも、差別扇動表現を特定個人に向けることがハラスメントになるという理解を普及させるためにも、ヘイトスピーチとレイシャルハラスメント、そしてヘイトクライムは区別して用いるほうが好ましい」としている[9]。しかし、実際には区別できる二項ではなく複合的になるケースが多いだろう。本稿においてはヘイトスピーチを論じる基調を以下とする。

2013年流行語大賞 にもノミネートされたヘイトスピーチ。「他者に対して乱暴で汚い言葉を投げつけること」であると理解している人が多い。しかしそれは間違いである。単に憎悪に基づく汚い表現ではないのだ。対象となる他者が、変更不可能な出自や属性を持つ社会的マイノリティ（日本における在日コリアンや性的マイノリティ、部落出身者など）であるということ。そして、それに浴びせかける差別言動は表現形態を問わないこと。こういった理解がすっぽりと抜けていることが多いよう思う。

すなわち、罵倒など激しい憎悪的表現をふくまず、優しい言葉で語りかけようが、内容が出自や属性に基づいた差別的なものを含んでいれば、それはヘイトスピーチなのである。単なる汚い言葉の応酬ならば「対等、同等の力関係において発生する暴力的トラブル」である路上のケンカと本質においては変わらない。（渡辺 ,2014）

(2) ヘイトスピーチの特徴と性質

ヘイトスピーチは次のような特徴と性質を持つ。

①自分では変更できない（または極めて困難）、出自・属性・性的指向などを攻撃する

②多数派から少数派へ向けられる。しかし単に数の多寡ではなく、そこに権力的関係が発生しているかどうかが問題となる。

③人を「個」として認識せずにひとくくりにする - ステレオタイプ化が促進される

④表現（言い方）によって、免責されない。

⑤そのほとんどはデマや噂（含むフェイクニュース）、思い込みが含まれる

⑥放置しておくと悪化 - エスカレートする性質を持つ

⑦反撃や抵抗が困難であり、被害者を沈黙させる

トータルで考えると、垂直的な権力作用によって生じた非対称の関係性の中で発生するのがヘイトスピーチであり、正確には表現というよりも「被害者の尊厳と心身を傷つける暴力の一形態」である。ガルトゥングは暴力を「直接的・構造的・文化的」の3つの三角形構造で説明したが、ヘイトスピーチはその3つすべてに該当する性質を持つ極めて悪質なものであると言うことができよう。

例えば、「時代の正体　ネット脅迫事件（下）ヘイトクライム断罪を 05.29 16:40 神奈川新聞」には【「極東のこだま」による脅迫事件経緯】が掲載され、標的になった在日コリアン女性がヘイトスピーチによって心身が深く傷つけられている様子が紹介されている。

※〈　〉内は一部抜粋したツイート

2016年

9月11日

〈オレは桜本のチョーセンを許さないよ。特にカンイヂャなww〉

11月19日

〈振り向けばーオレはここにいるー♪〉

崔さんが参加している地元桜本の祭り前日。

11月20日

〈雨上がりの桜本〉

崔さんは「極東のこだま」が桜本にいると確信。耳の聞こえが悪くなり、めまいと味覚を感じない症状に。ストレス性と診断される。

4月30日

〈オレも庭の植木に使うナタを買ってくる予定。川崎のレイシストが刃物を買うから通報するように〉

5月1日

崔さんは「ナタ」のツイートを見て眠れず、近所の交番に行き、警備強化を依頼。

ヘイトスピーチはかように、被害者に計り知れないダメージを与え、やがては「差別される自分が悪い」と思わないと心身のバランスがとれないほどに追い込まれる悪質極まりないものである。それが「⑦反撃や抵抗が困難であり、被害者を沈黙させる」沈黙効果の正体である。とは言え、多くのマジョリティにとっては被害者の心情を想像するにとどまり、その辛さや苦しさ、悲しみを身体化することは難しい。弁護士の池田賢太は、ネトウヨ（ネット右翼）と呼ばれるクラスターによる不当な弁護士懲戒請求に対して次のように述べている[10]。

正直、960名からの懲戒請求は精神的にものすごく負担です。この懲戒請求が認められるかどうかではなくて、むき出しの敵意が、実在する人々から向けられると

いう恐怖です。全国津々浦々からぶつけられる敵意が、自らの思考の末ではなく、実在するかどうかも怪しいブログ主からのメッセージに駆られて行動に移されているという恐怖です。

かつて、日本でも関東大震災のときに、朝鮮人に対する虐殺がありました。あの時は、インターネットが無かった。

いま、大きな自然災害や、人々が極限に追い込まれるような事態が起こったときに、得体のしれない誰かのメッセージによって、殺戮が始まるのではないかと思うと、生きた心地がしません。

在日の方は、あるいはマイノリティは、このような恐怖とつねに隣り合わせで生きていたのです。今回、960名からの懲戒請求を受けて、自分もその対象となったと自覚しました。いままでもそんなことは分かっていたつもりだったけど、それは分かったつもりに過ぎなかった。いままでの日常が、安全だと思っていた社会が、根底から覆るのです。

【弁護士大量懲戒請求に関するコメント】（※下線部　筆者）

私たちは、ヘイトスピーチに対して被害者を守る姿勢のみならず、私たちの暮らす社会全体の問題として据えることが求められている。池田は“当事者は私たち一人一人である”と述べているようにも思う。さて、ヘイトスピーチを下支えするカジュアルヘイトとはどのようなものであろうか。

2. カジュアルヘイトの態様

(1) 定義

日本語圏でカジュアルは日常的、気軽なという意味で使われているが、英語のcasualは必ずしもそうした使われ方だけではない。形容詞の場合は、「無頓着な」「臨時の」「偶然の」という意味が生じる。実際のcasualの使い方は以下のようなものである。

casual friendship 「軽い友情」
casual mistake 「ふとした間違い」
casual visitor 「思いがけない訪問客」
casual attitude 「気まぐれな態度」
casual inspection 「形だけの調査」
casual meeting 「偶然の出会い」
casual expenses 「雑費」
casual insurance 「災害保険」

casual revenue 「臨時収入」
casual talk 「ため口」
【出典 http:// ネイティブイングリッシュ .biz/entry479.html[11]】

野間ら反差別界隈で使用されてきたカジュアルヘイトという言葉は「日常的な」というよりは、むしろ「軽い」「無頓着な」「ふとした」という文脈が強いものだと思われる。よって本論においては、カジュアルヘイトは、負の文化の一形態であり、「社会の中に埋め込まれている無頓着な差別的言動の総称」と定義する[12]。特徴としては、あからさまな差別的言辞を伴わないこと、発話者がむき出しの悪意を持っていないこと（または持っていても意図的に表明しない）、しばしば他者に対する優越的（時に侮蔑的）な笑いすなわち嘲笑を伴い、ジョークに置き換えられることなどが挙げられる。

よってその言動が差別であるかどうか気づきにくいという側面を持ち、気づいたとしてもそれを批判し、抗議することが難しい空気が醸成される。それゆえに、言葉を聞いただけで誰しも眉をひそめるような典型的なヘイトスピーチとは異なり、ある意味非常に厄介なものと言うこともできよう。また、カジュアルヘイトは多くの場合、自分と異なる（と思い込んでいる）他者や社会的属性をひとくくりにすることによって成立するため、マイノリティの孤立化と社会的分断、ステレオタイプ化を進め、差別構造を強化するという意味でも重大な問題を含んでいる。

(2) 差別構造を強化するカジュアルヘイトの4形態

そもそも差別とは何だろうか。

> 差別とは、差異がある条件のもとで、つまり、ある一定の社会関係（人間関係）のもとで、意図的にレッテルを貼られ、ステレオタイプ化され、排除、忌避、抑圧、攻撃、蔑視の対象とされ、基本的人権や市民的権利が侵害されるなど、社会的な不利益を被る状態のこと。（小林 ,2016）

この場合の差異は、“選択や変更が不可能、あるいは限りなく困難な出自や属性によるもの”に由来するものである[13]。河野（2011）はリベラリズムを解説する中で、正義とは「各人が各人にふさわしいものを得ること」と定義し、等しいものを等しく扱うという意味で公平性や平等性がその本質であるという。人権を相互に尊重しあう関係が社会的に担保されているかどうかが本質的な問題である。

これらは言葉で表せば簡単だが、ことはそう容易ではない。例えば大森（2018）は、アメリカにおける黒人差別に端を発した殺人を伴う凶悪なヘイトクライムについて、南部の白人は、頭がおかしかったわけでも、とりわけ残忍だったわけでも（実際に黒人を痛めつけることはあっても、生まれつき誰に対しても暴力をふるう性質であったわけでは）ないと述べている。そして「人種差別をしていたのは、生まれ育った地域を愛し、

それまで『当たり前』だった暮らしや流儀を壊させまいとしていた、私たちと同じ『普通』の人間だったのです」と分析する。

確かにヘイトクライムは突然起きるわけではない。「図２（筆者作成）」のような構造の中で段階を経ながらヘイトクライムそしてジェノサイドへの階段を登るのである。また、下から積み上がる段階的な構造だけではなく、上位段階 - ヘイトスピーチ・ヘイトクライムを目の当たりにした時に、下位段階 - カジュアルヘイトが強化されるというスパイラルな構造にもなっている[14]。

私たちが課題にすべき問題は多岐にわたるが、大切な視座は、“日常の中に「当たり前」にある暮らしや流儀（大森，前掲）に「潜む差別」”を社会構成主義の立場から問題に据えることである。その核となるカジュアルヘイトは次の４つに分類できる。

①異質な（もの）を笑う文化としてのカジュアルヘイト

②未成熟なまたはフェイク情報の中で生まれるカジュアルヘイト

③政治的な意図で作られるカジュアルヘイト

④売れるコンテンツとしてのカジュアルヘイト

この４形態は複合的であり相互に関連しているものであるが、それらに共通する心理的背景（メカニズム）はどのようなものであろうか。

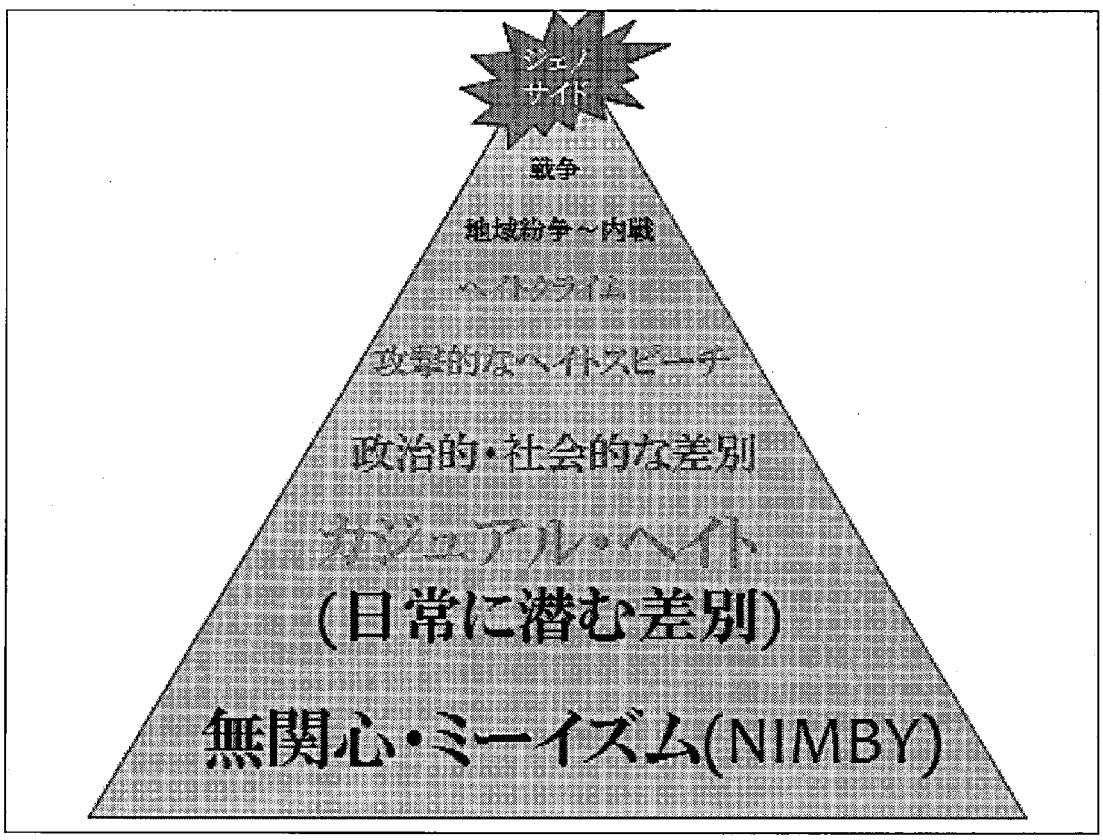

図２

3. カジュアルヘイトの実例と心理

カジュアルヘイトは、重層的かつ複合的な心理から生まれる。本節では、4つの分類にしたがってその心理的特徴を考察する。

(1) 異質な（もの）を笑う文化としてのカジュアルヘイト

「とんねるずのみなさんのおかげでした30周年記念SP,（2017年9月28日放映」、出演者が「保毛尾田保毛男（ほもおだほもお）」というキャラクターを演じた。このキャラクターは明らかに男性同性愛者を揶揄し、笑いものにするためのものである。性的マイノリティはこの事例にあるようにカジュアルヘイトの対象にされやすい。基本的には、マジョリティであるヘテロセクシャルが「一般」とされ、性的少数者は異質な少数者（マイノリティ）として笑いの対象とされるわけである。以下ツイートされたタレントの発言（図3）なども、社会に埋め込まれたカジュアルヘイトということができよう。

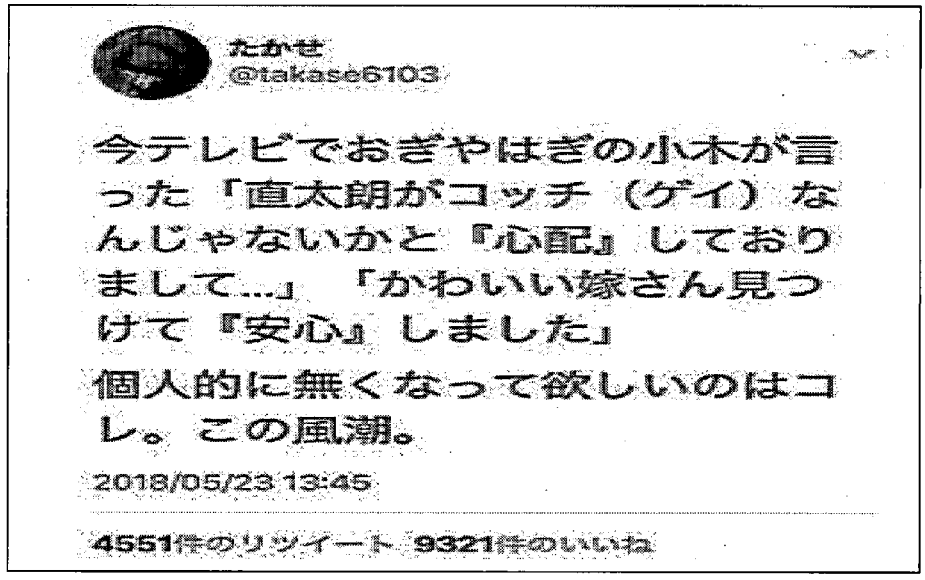

図3

こうした「心配」は嘲笑的ではあるが、発話者自体が“悪意を伴わない心理”に基づいているために、差別として問題化すること自体が容易ではない。

(2) 未成熟なまたはフェイク情報の中で生まれるカジュアルヘイト

在日コリアンに向けられるヘイトスピーチの根幹には、多くのデマ（フェイク情報）が含まれている。典型的なのは何の根拠もなく流布されている「在日特権」という言説である[15]。また、陰謀論やデマ情報は後を絶たない。311の被災地で金庫に触れている持ち主の写真に対して、以下のようなツイート（図4）がなされ、猛烈な勢いで拡散した。

RT @oonaoto: これは震災時に女川の水産工場で働いてる中国人が金品漁ってる写真らしい。遺体の金品も平気で抜き取ってたとか。 http://t.co/GsFXzZUNvY

これ、本当なの？ "@tk_video
まさに韓国は糞食い、乞食国家。チョンは地球から消えろ『韓国のレスキュー隊が東日本大震災の被災地でやらかした事が酷すぎる…完全に国際問題レベル』

図4

SNSの発達とともに、多くの人たちが手軽にそれら膨大な情報に触れることが可能になった。このツイートは明らかに、悪意を拡散する目的でなされたものだろう。しかし、その中身を確かめることなく、脊髄反射のようにリツイートする人々によってカジュアルヘイトの下地が作られる。ここにある心理状態は「自分は、多くの人が知りえない情報を知っている」という屈折した優越感情であり、認知の歪み（誇張的で非合理的な思考パターン）である。

(3) 政治的な意図で作られるカジュアルヘイト

かつて東京都知事の石原慎太郎は「今日の東京を見ますと、不法入国した多くの三国人、外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している。こういう状況で、すごく大きな災害が起きた時には大きな騒擾（そうじょう）事件ですら想定される（2000年4月9日、陸上自衛隊・練馬駐屯地の式典）」と発言した。石原はさらに「北朝鮮のミサイルが日本に当たれば、長い目で見て良いことだろうと思った。日本は外界から刺激を受けない限り、目覚めない国だからだ。特に北朝鮮のミサイルが核、生物弾頭を搭載するとなれば、日本がいかに無防備か理解するだろう（米紙ロサンゼルス・タイムズ2001年3月12日に掲載されたダボスでのインタビュー）」とも述べている。明らかに政治的な意図でつくられた排外主義である。

また、麻生太郎副総理は「朝鮮半島から大量の難民が日本に押し寄せる可能性に触れたうえで、武装難民かもしれない。警察で対応するのか。自衛隊、防衛出動か。射殺か真剣に考えなければならない（2017年9月23日）」と発言している[16]。こうした公人たちの発言によって、広く浅く（結果として深く）隣国への嫌悪感情が醸成される。ネトウヨと呼ばれるクラスターの多くが石原都政や安倍政権を支持してきたことと無関係ではないだろう。排外主義に基づく危機を煽り、国内体制を固める手法の心理的有効性はナチスによってすでに証明されている[17]。作られた危機は、それが意図的であるだけに深く人々の心に入り込みやすい。

(4) 売れるコンテンツとしてのカジュアルヘイト

「ガキの使い!大晦日年越しSP絶対に笑ってはいけないアメリカンポリス24時!」(日本テレビ・2017年12月31日）において、タレントが黒塗りメイクで登場した。黒塗り姿は35分ほどで、Twitter上では「面白い」「めっちゃ笑える」という反響があった。

アメリカではブラックフェイスは差別コンテンツとして認識されており、公の場で開陳することは許されていない[18]。しかし、日本では「これが差別なのか、黒人文化をリスペクトしているだけだろう」という声が上がる。「知らなかった」または「差別する意図がなければ差別ではない」というのは、マジョリティの言い訳に過ぎない。

バイエ・マクニール（アメリカ・ニューヨークのブルックリンに生まれ育ったアフリカ系アメリカ人。2004年に来日して以来13年間、横浜に暮らし、作家・コラムニスト・教師）は次のようなコメントを残している[19]。

> 私の気持ちは半々です。半分の私は、日本のテレビコメディーや音楽でブラックフェイスを見るたび、見下されたような、馬鹿にされたような、そして表面だけを見られて、人間性を否定されているような気分になります。
>
> 私の肌の色が、私自身の人間性が、芝居の小道具、あるいは脚本にされたかのように感じるのです。
>
> しかし、もう半分の私は、『彼らは子供で、わかっていないだけ。だから我慢しなきゃ』とも思うのです。敬意を持って、一緒に生きていこうと決めた日本の人たちに対して、このような感情を抱いてしまうのは、つらいことです。

カジュアルヘイトは当事者に対する心理的共感が極めて弱い状況（または欠損している）で発生するものである。そして残念なことに、こうした“自分とは異なる（と思い込んでいる）他者”を笑い者にする嘲笑の文化は安易に人々の心をとらえ、売れるコンテンツとしてのマーケットを形成している。ORICON NEWSでは、日本の10代から50代の計1000の男女に対して調査を行ない、黒塗りメイクの賛否の割合について次のような結果を示している[20]。【黒塗りメイクを差別だと思うか?】

- 差別にあたると思う 7.9%
- 差別にあたると思わない 55.6%
- どちらともいえない / わからない 36.5%

この回答に表れている数字こそが「社会の中に埋め込まれている無頓着」であり、カジュアルヘイトの根っこではないだろうか。

4. カジュアルヘイトの生まれる心理的背景

今まで述べてきたように、カジュアルヘイトはヘイトスピーチと比較すると可視化し

にくい。しかし、それは問題が軽いことを意味しない。ヘイトスピーチは「⑥放置しておくと悪化・エスカレートする性質を持つ、⑦反撃や抵抗が困難であり、被害者を沈黙させる（再掲）」性質を持つが、カジュアルヘイトの沈黙効果も軽んじるわけにはいかない。カジュアルゆえに周囲の人は同意せざるを得なくなり、同調しなければ沈黙を強いられる[21]。それは当事者だけが沈黙を強いられることを意味せず、社会集団にも沈黙効果を拡大するものである。

こうしたカジュアルヘイトの生まれる心理的背景は複合的である。まず考えられるのがジェラシーの構造である。小谷（2012）は「自分より権威や権力が上位にあるものを叩くのが欧米型のバッシングであるとするならば、日本型は自分より立場が弱いものや、マイノリティを好んで叩くという特徴がある」と言う。満たされない思いややるせない感情が他者への攻撃に転化するケースである。

そして、異質な他者に対する警戒感が、カジュアルヘイトにつながる場合も少なくない。人はそもそも異質であるにも関わらず、マジョリティ側に立つとマイノリティを異質と認識することがある。よってこの場合で言う異質な他者とは、「自分にとって異質と感じる他者」という意味である。グッドマン（2017）は「人は皆、複数の社会的アイデンティティを持っており、社会的なカテゴリー分けによって特権集団と劣位集団のどちらにも属しうるし、権力構造のどちら側にも立ちうる」と指摘し、マジョリティとマイノリティを単なる数の多寡ではなく、社会的カテゴリーによってそれが規定されるとしている。しかし、常に自分がマジョリティ側に立っていると錯覚すると、その立場が普遍的で絶対的なものと認識し、マジョリティ側にいる属性の人々に違和感を抱く。その違和感はしばしば警戒感に変わり、その状態を解消するために“違和感を感じる他者より自分を優越的な位置に置こうとする”心理作用が生まれる。国内における少数の中国人観光客の一部に関する報道を見て「中国人はマナーが悪いよね」「中国人ってちょっとね」みたいな言動は“まさにカジュアルに”散見される。嘲笑を伴うエスノセントリズムの根幹はここである[22]。そしてそれら嘲笑の文化は、私たちの暮らす社会の心理をそのままミラーリングする中で成立している。

同時に警戒感は恐怖心と相似形でもある。小林（2016）は、利害の対立により敗北し、利益を喪失することへの恐怖、「異形」や「奇形」、異なる文化（言語・宗教・習俗）に対する恐怖が存在すると言う。「すべての差別感情はその裏に恐怖心を伴う（再掲）」が、もともと恐怖心は危険を察知回避する - 人類が存続するための生物的本能でもあり、人間の人間たる所以でもある。また、“何を恐れるべきで、何にその必要がないか”を峻別する力も兼ね備えているのが私たち人間である。しかし認知の歪みが、“恐怖の対象としなくても良いもの、すべきできないもの”をも混同させて、恐怖の対象としてしまう。

3つ目の視点はストレスの隔離である。人は他者の抱く「辛い経験や感情」を自分のものとして引きうける共感性を持っている。しかし、それは自分の中に他者の悲しみを

引き受けることを意味し、一定の心理的負荷 - ストレスがかかる。それを回避するために、例えば不慮の事故にあった他者に「そんなところ行った彼にも過失がある」と思う心理状態がストレスの隔離である。ヘイトスピーチを浴びている当事者に対して、共感のチャンネルではなく、「差別される方にも原因がある」と考える心理につながる[23]。「優勝劣敗」を魂とする新自由主義的価値観が人々の心象風景を形成する中で、それらは自己責任論に変換されて、私たちの社会のあらゆる場所に分断と対立を生み出している。

最後に問題としたいのは、リテラシーの脆弱性と確証バイアスである。今まで述べてきたようにカジュアルヘイトのほとんどは優越感情に支えられたデマや噂、思い込みによるものである。確証バイアスは、“自分にとって都合の良い信じたいものだけを信じる”または“都合のよいことだけが真実と思いたい”という心理作用である。SNS の普及に伴いフェイクニュースやデマがそのまま流布されている現状において、リテラシーの脆弱性と確証バイアスは相乗効果となり、そのままカジュアルヘイトにつながっている。

おわりに

ヘイトスピーチに対抗するために、2013 年から路上での抗議活動が本格化した[24]。時に逮捕者も伴うその抗議活動は、「どっちもどっちだ」という相対主義的な批判を受けつつも、ヘイトスピーチを社会問題としてせり上げることに結果として「成功」した[25]。その結実が「ヘイトスピーチ解消法（前述）」であり、ヘイトスピーチは看過してはいけないという一般的な世論である。

しかし、本稿で述べてきたように、カジュアルヘイトはすでに私たちの社会（一人一人の心理）に深く潜み、負の文化として一定のマーケットを形成している。それを克服することは容易ではない。そのためには、リテラシー（ものの見方）を磨くこと、他者と出会うリアルな経験値を増やすこと、日常において共同的な他者関係を構築することが求められる[26]。社会現象として、ポスト・トゥルース（「2016 Word Of The Year（2016 年を象徴する言葉）オックスフォード英語辞典」が問題化されているが、政治課題のみならず、私たちの日常に潜むポスト・トゥルースを意識しなければならないだろう。

最も重要なことは、社会にあふれる様々な言説を“これはカジュアルヘイト - 社会の中に埋め込まれている無頓着な差別的言動ではないのか”という疑い持ち問題化する姿勢である。それは社会構成主義の立場から、日常に埋め込まれて見えにくくなっている問題を視覚化し、解決すべき課題として取り出すことである。

差別問題に取り組むことは被差別者 - 当事者に置かれているマイノリティのためだけでない。私たちが住む社会の基本的な構造を組み替えることであり、“異なる他者と共に生きることができる多様性のある社会 -Diversity” をつくるためである。「違いは豊かさ」であると同時に「Diversity is strength」[27] でありその文脈で構成される場所は、誰にとっても住むに値するエンパワメントされた社会である。そして、カジュアルヘイ

トを問題化する意味は、一人一人の心理を問い直すと同時に、社会に埋め込まれている支配と抑圧のメカニズムをもう一度問い直すことでもあろう。

黒人は肌の色が黒いから差別されたのではありません。社会の内部で、1つの社会集団が別の社会集団を支配・抑圧しようとしたとき、肌の色が黒いという差異が、その差別を合理化する理由づけにされたのです（小林 .2016）

※本論は関係性の教育学会課題共同研究発表「現代社会とカジュアルヘイト-埼玉朝鮮学校補助金再開を求める市民アクションの報告と考察を通して-」,2018年6月3日,渡辺雅之、金理花（東京外国語大学大学院 博士後期課程）,宮﨑理（名寄市立大学保健福祉学部）を元に再構成したものである。

【参考文献】

大森一樹,『MARCH2 ワシントン大行進』, 2018年,岩波書店, ,解説

金明秀,『レイシャルハラスメントQ&A』,2018年,解放出版社,pp68-71

小谷敏,『ジェラシーが支配する国-日本型バッシングの研究』,2013年,高文研

小林健治,『最新　差別語不快語』,2016年,株式会社にんげん出版,p.27,pp30-31

河野哲也.『道徳を問い直す-リベラリズムと教育のゆくえ』, 2011, ちくま書房, pp.50.-51.

ダイアン・J・グッドマン『真のダイバーシティをめざして-特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』2017年,上智大学出版,p.11

渡辺雅之,『いじめ・レイシズムを乗り越える道徳教育』,2014年,高文研,p14

【注】

1　http://www.moj.go.jp/content/001201158.pdf　（2018年6月20日,閲覧）

2　例えば弁護士への大量懲戒請求事案の原因をつくった「余命三年時事日記（バックアップ）」には27都道府県へそして埼玉県上田知事などへの意見文をオンラインにて寄せた人物の投稿をそのまま記載している。返信があったのが上田知事だけであることを示し、知事の回答全文を掲載している。https://goo.gl/vEDwXx　（2018.5.30 確認）

3　とは言え、そうした県民感情が“県民全体の総意”であるという根拠は存在しない。

4　東京新聞「朝鮮学校に補助金再開を　識者・市民団体が県に声明」　http://www.tokyo-np.co.jp/article/saitama/list/201804/CK2018041702000130.html（2018.6.27閲覧）

5　大東文化大学教職課程必修科目「教師論」の一回目の授業。「ヘイトスピーチ」という言葉を聞いたことがあると答えたのは、3割程度で、残りの7割は未知であった。2018年4月、受講生は約120名

6　Counter-Racist Action Collective

7　参考文献　安田浩一『学校では教えてくれない差別と排除の話』,2017.皓星社

8　本邦外出身者を対象にしているため、日本国籍を持つアイヌ民族や部落出身者等への差別問題が抜けているという法理上の不備が見られる。また、罰則規定がない理念法のため実効性に関して課題が残っている。

9　金の指摘は、今後この問題を考える上でキーとなる概念である。

10　池田賢太フェイスブック投稿https://www.facebook.com/kenta.ikeda?hc_ref=ARTFJf2CxErkKnxPgS9AzB7t0ZeGqrx9S4o756MHiMTEwh08Bf8irO_kvm7TtGTvix0　（2018.6.6確認）

11　2018年6月5日閲覧

12　他者に語る言葉としては「日常に潜む差別」という表現を併せて使用することもある。
13　SOGI-性的指向、性自認　なども含む。
14　よって、上位段階が発生している場合、路上（現場）での抗議や抵抗も欠かせないものと言えよう。
15　以下を参照のこと　野間易通,『「在日特権」の虚構』,河出書房,2013
16　https://www.asahi.com/articles/ASK9R6DCPK9RUTFK00J.html（2018.6.24 閲覧）
17　【参照】長谷部恭男,石田勇治,『ナチスの「手口」と緊急事態条項』2017年,集英社新書
18　「ミンストレル・ショー」は、1820年代のアメリカで生まれた芸能で白人が黒塗りのメイクをして、黒人奴隷たちの生活の様子を面白おかしく演じたショー。のちに黒人自身が自ら黒塗りをして演じることもあり、社会的な批判を浴びた。ミンストレル・ショーの動画を見た靜哲人（大東文化大学外国語学部英語学科教授）は「会話の内容自体は単なるドタバタでそれほどおかしくはないが、使っている英語が、わざと黒人の片言英語を真似して、滑稽さを出している。例: be動詞はすべて is、もしくは脱落、 haveはすべてhas th音をDで発音。要は、黒人の片言英語をマネてからかっているのですね」とコメントし、その差別性を指摘している。
19　The Huffington PostNEWS 2018年01月03日 08時29分 JST
20　https://www.huffingtonpost.jp/nishanta/black-white-gray_a_23339373/
21　例えば、「オネエって〇〇だよね」と面白おかしく話題を振られた時に、カムアウトしていないセクシャルマイノリティはどのように振る舞うだろうか。力なく共に笑うことでしかその場にいられないというようなことはないだろうか。それが沈黙効果である。
22　自文化中心主義は、政治的なものと文化的なものに分けられるが、この場合は文化的なエスノセントリズムである。
23　いじめられている子を傍観者の子どもが「オレはいじめないけど、いじめられているあいつもちょっとね」というような言説とも同じである。
24　例えば、反差別集団「男組」の高橋直輝（故人）は、身体をはって、路上での抗議活動を組織してきた。参照『いじめ・レイシズムを乗り越える道徳教育』,pp.19-20
25　「〇〇人は出て行け、死ね、殺せ」という言説と「お前ら差別をやめろ」という言説は、たとえ表現的には同質に見えても、その主張の本質において等価であるはずもなく、「どっちもどっち」という批判は的外れである。そしてそれは、こうした問題に距離をおいて自分はコミットしないという傍観者の立場に身を置くものであり、私たちの社会のシニシズムを強化する。
26　例えば、筆者も参加している路上生活者へのサポート（夜回り活動）は、若い世代の参加者が「ホームレスの人は怖い人、汚い人だと思っていたが、それは表面的な見方で、決めつけだと気づいた」などの感想が度々述べられる。（埼玉県川口駅前）
27　東京レインボープライド2018 ,AIG,PV　https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000038.000020772.html（2018.6.26 閲覧）